

第13部会

ている。ところが帰郷後、近隣の村で憑き物騒ぎがあつてこれを祓いに行つたさい、その憑き物を本人の主張どおりに数百年前この地で自害した武士の霊であると認め、その前世、死後の世界の様相、死霊の日常について数日間に渡つて克明な質疑応答を行い、『幽顕問答鈔』にまとめた。同書には宮崎の行つた除霊法、審神者としての質問、御霊封じの法、石碑を建立して神として祀ることなど、死霊への対処が詳細に記されている。

調査者が、幽冥から顕世を訪れたとされる鬼神（ここでは人間の死霊）を情報提供者として聞き取り調査を行う、という手法を宮崎は採つたわけである。彼はそのさい、除霊法という、鬼神と直接交流する技法を用いた。彼の除霊法は伝統的かつ受動的な種類の霊術にすぎなかったが（調査者が自ら、脱魂して異界を訪れたり鬼神を顕世に招いたりする能動的なものではないので）、篤胤の幽冥論の検討という明確な目的にそつて霊術を転用した点で、この調査は重要である。

しかし幽顕往還体験が平田派内で本格的に研究されたとはいえない。思想的には以下の問題があつたからである。一、右の記録類の内容と記紀以下の古典の記述との矛盾をどのように解消するのか。二、篤胤のいう幽冥は範囲が広すぎる。右の記録類に描かれた幽冥は雑多で、世界間の関係も鬼神間の関係も明瞭でない。それらをどのように整合させるのか。三、情報提供者の語りの信頼性と調査者の記述の信頼性をどのように確認するのか。四、調査者が幽顕往還体験者に巡り会えるか否かはほとんど偶然による。霊術を幽冥の研究に用いようにも、管見のかぎり文化年間から明治初期に至るまで能動的な霊術は平田

派内には存在しなかった。結局これらの問題は、明治初期に平田派国学者が政府から一掃されたのち、篤胤の幽冥論の影響を受けた神道家の一部によつて解決が目指されていった。

排仏論の根拠としての海外情報

——平田篤胤の事例を中心に——

森 和 也

大航海時代はヨーロッパに世界地理の知識の拡大をもたらした。その知識は南蛮人の到来によつて海外情報として日本にも伝播し、キリスト教禁教以降も継続して流入し続け、日本人の世界観の発展に大きな影響を与えた。それは単に日本人の世界地理の知識を拡大させるだけではなく、須弥山世界説に基づきインド・中国・日本で完結していた三国世界観の崩壊を引き起こした。この崩壊はそれぞれにインドという地域、中国という地域に対して、価値の相対化をもたらすものであった。

しかし、海外情報をもたらしたものは、インドの世界地図上に占める価値の相対化だけではなかった。近世日本において、倫理的観点あるいは経済的観点、宇宙論的観点などから排仏論がさまざまに展開されたが、イスラーム国家ムガル帝国の侵略による伝統的なバラモン・ヒンドゥー・インドの衰退と、それにとまなう仏教の祖地インドでの仏教の衰微という新しい海外情報、仏教に対する評価を引き下げる上で、有効な材料となり、「地理的」観点からと呼び得る排仏論が存在した。

十七世紀の初め、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』、ジョリオ・アレニの『職方外紀』などによって「印弟亜」・「莫臥爾」の二つの「インド」の存在が知られていたが、『職方外紀』の印弟亜の箇所では、仏教に対する無知から、ヒンドゥー教と混同され「奉仏」という記述が見られていた。しかし、シドゥッティに取材した新井白石の『采覧異言』（正徳三年）では、キリスト教、イスラム教に圧迫されて仏教が衰えたという記述があり、インドにおいて仏教が衰微しているという情報は確実に日本にもたらされていた。これを承けて、白石の『采覧異言』に大幅な加筆訂正を行った山村才助の『訂正増訳采覧異言』（享和二年）では、「彼浮屠氏ノ國ノ如キハ古ヘハ厄勒祭亞ニ破ラレテ帝王擒トナリ、今ハ莫臥兒ニ併セラレテ回々教ノ國トナル者、豈我カ萬古不易神靈傳統ノ帝國（日本）ト同日ノ談ナラシヤ。」（巻十）と、日本との対比においてインドの国力の弱さが述べられ、山片蟠桃の『夢の代』（文政三年）では、「佛法天竺ニ始リテ、コレヲ用ユルハ南天竺ノミ。ソノ他ハミナモール宗トナル。」、「本源ノ天竺ニ近國ハ衰微ナルヨシ。」（巻九）など、排仏論の文脈の中でインドでの仏教の衰微が語られていて、十九世紀の知識人の世界では、共有された知識となっていた。

平田篤胤の講義を編輯した『出定笑語』（文化八年）では、玄奘の『大唐西域記』のほか、同時代の世界地理書『訂正増訳采覧異言』および森島中良の『紅毛雑話』（天明七年）を引用してインドの地誌的紹介を行っている。『出定笑語』での篤胤のインド理解には、正確な情報に混じって、ヨーロッパ人の誤解をそのまま受容して釈迦の生地をスリランカに比定し、ま

た、仏教の衰微を語る際に、東南アジアをインド世界に含める当時の東西に共有する地域概念を前提とした「釋迦ガ出生シタル、カビラエ國ハ、トクニ、ソノ子孫モ、ミナ亡ビテ、今ハカノ崑崙ボノ國ト共ニ、阿蘭陀ニ、セシメラレテ佛法モ大半亡ビテ、切支丹宗ニ成テ」と、インド人と蘭領東インドのマレー人を混同する錯誤なども見られる。こうした種々の海外情報から、総括としてインドの風俗を「スベテ下國ノ風俗デ」（巻上）であると断定するインドおよび仏教の価値を貶める講説を行っている。篤胤の戦略は、仏教の祖地としてのインドに対して一般の聴衆が持っていた漠然とした崇敬の感情を、同時代のインドの実像を伝えることで突き崩すことであつたと考えられる。この偶像破壊に対しインドに関する海外情報は有効な材料を提供するものであつた。それは、インド認識の深まりが、インド蔑視と仏教の排除に結びつくという皮肉な関係であつた。

淵岡山より見た藤樹の思想「良知・孝」

鈴木 保 實

藤樹（一六〇八一―一六四八）の高弟に熊澤蕃山（一六一九―一六九二）と淵岡山（一六一七―一六八六）がいる。その一人淵岡山は正保元年（一六四四）二十八歳の時、藤樹（三十七歳）に入門し、その死まで師事した。藤樹の没後、京都に出て師説を広めた。岡山は藤樹の思想「良知・孝」についてどの様